

防災公開講座(第 43 回「ふじのくに防災学講座」)

平成 23 年 12 月 17 日(土) 10:30 から

静岡県地震防災センター ないふるホール

テーマ「東海地震に備えて～いざというときの心理と行動～」

講師 河本 尋子 富士常葉大学大学院 環境防災研究科 講師

※ 聴講者数 70名



東日本大震災による被害は、私たち人間が生活してきた地域を大きく変えました。災害は、私たち人間が生活する社会・環境に大きな衝撃と変化をもたらす現象です。近年災害による影響は、大規模かつ広域的になっています。将来発生が危惧される東海・東南海・南海地震に備えるべく、人間の心理と行動のメカニズムを理解することは重要です。

災害時の人間心理を考えると、多くの人々がパニックに陥ると一般的には言われています。しかし、パニックおよびパニック行動には、差し迫った脅威・危険があり、それを回避する方法があり、且つ生き残る可能性は非常に少ないと人々が考えること、また、その際にコミュニケーションが成立しないなどの発生条件があります。むしろ災害時にパニックが発生するというパニック神話の影響によって、情報の判断・伝達が遅れてしまい、被害が甚大になる危険性があります。災害による衝撃・変化に遭遇して、何が起きているかを理解できない、頭が真っ白になるという反応は、誰にでも起こり得る正常なものです。この反応は失見当といい、数時間程度でこの状態から脱してさまざまな行動をとるようになります。

私たち人間には、安全な状態を当たり前と捉え、ある範囲までの異常を正常の範囲だと考える心理メカニズムが働きます。避難勧告・避難指示が発令されても多くの人々が避難しないという事実は、この心理メカニズム：正常性バイアスによって説明できます。また、正常性バイアスをもった人々が周囲にいと、彼らの行動を参考にして事態の危険性を判断する多数派同調バイアスも働き、避難行動が遅れます。また、避難時の特徴として愛他行動も見られます。災害や状況によっては迅速な行動が求められる場合もあり、避難の遅れにつながる可能性があります。この他、行政機関等の危機対応専門集団を過信せず（エキスパートエラーの可能性認識）、自助に取り組むことも重要です。これらの課題について、平常時に私たちが家族や地域の人々とよく考えて話し合うことが重要です。

(参考文献：広瀬弘忠著『人はなぜ逃げおくれるのか』集英社新書)